

開港のひろば

Number
51

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会
発行日／平成8年1月31日（水）

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
印刷／中川印刷株式会社



Samurai Shokai, Kurio King, Yokohama, Japan.

サムライ商会で扱った彫刻家具 有隣堂所蔵絵葉書

企画展 横浜家具を創った人びともうひとつの横浜家具 彫刻家具の四天王



彫刻家具

かつては、外国人にとって、横浜家具はヨコハマ・ファニーニチャーといえ、輸出向きの彫刻家具をさすのが相場であった。雲たなびき龍が舞い菖蒲の咲きみだれる木彫家具は、明治中期から大正にかけて調度品として横浜から欧米に向けて盛んに輸出され、欧米におけるジャポニズム熱をおおいにかきたてたのである。

「明治二十八年頃沼島某欧州視察ヲ終へ帰朝シテヨリ椅子ニ社殿等ノ彫刻ニ模シタルモノヲ応用シテ之ヲ輸出シタルニ初マリ」と『各府県

輸出重要品調査報告』（農商務省商務局 明治四二年）は記し、また、『昭和五年末現在 横浜に於ける中小工業』（横浜商工会議所）は、「椅子、花台其他の家具に雲龍様様の東洋趣味豊かな彫刻を施した横浜輸出彫刻家具は、明治二十年頃篠原氏（不老町品川商会先代）に依って初めて製作されてこのかた、幾多の改良研究を経て独特の輸出品となり、横浜彫ファイニチャーの名の下に逐年輸出額は増加し、各地の博覧会に於いても屢々優良輸出品として名譽ある賞牌を受くるに至った」と彫刻家具の由来を記している。

ここに彫刻家具の創始者として挙げられている「沼島某」（沼島治郎兵衛）と「篠原氏」（篠原芳次郎）は共に外国人相手の骨董店キュリオ・ストアの経営者であり、明治三〇年前後に彫刻家具の製作工場を設けている。彫刻家具の製作者としては高松政吉、丹下武三郎の名を挙げることが出来る。沼島治郎兵衛、篠原芳次郎、高松政吉、丹下武三郎を初期横浜彫刻家具界の四天王とする。

沼島治郎兵衛

横浜への出店時期は定かでないが一八八四（明治一七）年版ジャパン・ディレクトリーに広告を見いだすことができる。店舗は本町四丁目五六番地に所在し、絹製品を扱っていたようである。八七年版ディレクトリーから一旦名が消え、九一年一月二八日付ジャパン・ガゼット紙の広告

もうひとつの横浜家具 彫刻家具の四天王

J. NUMASHIMA'S FINE ART EXHIBITION の店名をもって再登場する。この間洋行していたのである。店舗を北仲通一丁目一番地に移し、取扱品は絹製品はもとよりとして金属器、陶器、漆器などにひろがっており、木彫家具 Woodcarved Cabinets も含まれている。九六(明治一九)年六月内田町六丁目二六番地に家具製造所 J. NUMASHIMA'S Art Furniture Factory を設ける。この家具製造所は、一九〇一年七月遠藤安晴の手に移る。

一九〇二(明治三五)年二月発行の『建築雑誌』は、「横浜遠藤家具製作場概況」を伝え、創業経緯を次のように記している。

「当製作場は元沼島治郎兵衛氏の創業に係るものにして、氏は夙に濠洲に赴き彼地に於て木製家具の必需品たること及び之れに對せる欧米諸国の輸入品を待つもの多く、從て其の利益の頗多なるを察し、之れを我邦に於て製作して輸出の途を開くに至らば優るも決して劣ることなきを信じ、去る明治二十七八年の交一旦帰朝して現工場の位置を定めて斯業を起すに至れり、当時我國に於ては維新後宮殿の建築衰頹し、隨て之れに附隨せる宮彫師の如きは自然生計の途を失ふに至りしを以て、是等の者を利用して家具彫刻の上に応用せしめ、大に各国の形式に準し更らに本邦固有の意匠圖案を当て嵌めて、外国人の嗜好に適せしめ其の販路の拡張を試みたり、果せる哉製作せる

器具は総て外国人の嗜好に適し本邦に漫遊せる外国人等は帰国の途、大抵本邦の名産として購買し或は注文を残すを常とし、年々其産額を増加し其の額万餘円に達せりと云ふ以て其の盛況を察するに足るべし」

沼島治郎兵衛は、その後、山手町地先の海水浴場「万歳館」や、「株式会社横浜教育水族館」の経営にあたるなどし一九一五(大正四)年八月二日没している。

沼島治郎兵衛の家具製造所を継承した遠藤安晴は、一八六八(明治二)年横浜に生まれ、九一(明治二四)年渡米、一九〇〇年帰国したとされる。一九〇四年のリエージュ万国博覧会に出品して大賞を受けるなど、「遠藤家具工場の名中外に轟ろき、一時大いに繁栄を極め」(『日露戦役

神奈川県紀念誌)、横浜雜貨商同業組合副組長を勤めるほどであったが、日露戦後経営不振に陥り、再起することなく一〇(明治四三)年五月二三日没した。

篠原芳次郎

「篠原氏」こと篠原芳次郎(一時「成尾」姓)は、一八九〇(明治二二)年七月居留地三五番地にキュリオ・ストア(骨董商)品川商会を開き、九四年境町一丁目二〇番地に移り、「主として美術彫刻物の直輸出に従事」(『横浜成功名譽鑑』篠原孝子の項)している。

彫刻家具の製作に係るのは先考幸四郎(天保三〇明治三七年)の代からのように、「幸四郎氏五十七八歳の頃横浜に來り、従来骨重視された

る彫刻物を商品化せしめんとし、外人の嗜好を探り能く茲に適応せる技巧を揮ひて其方面に傾注製出せしに忽ちに妙技は一汎の認むる処となり、堺町の店頭に紅鬚碧眼の客絶えざるの盛を致し、横浜彫刻家具製作の嚆矢を作りたる」(『神奈川県紳士録』篠原義雄の項)という。一九一〇年のロンドン日英博覧会、一五年のサンフランシスコ巴拿馬太平洋万国博覧会に出品するなど、遠藤安晴・丹下武三郎亡き後の横浜彫刻家具のリーダー的存在であった。

一九二三(大正一二)年芳次郎が引退した後は、義雄が継承し、二六年三月「有限責任横浜輸出彫刻家具信用販売購買利用組合」を組織して関東大震災により壊滅した彫刻家具の復興に努めた。

高松政吉

	
高松政吉	遠藤安晴
	
丹下武三郎	篠原義雄

高松政吉は、『彫工左氏後藤氏世系図』巻末の「明治十六年現在彫物師人名 横浜分」に記載があり(熊本大学伊東龍一氏教示)、由緒ある彫物大工の家系につらなっていることが判明している。創業は一八七七(明治一〇)年とされ、「横浜内外貿易商便覧」(九三年)には「雜種商」として、「横浜姓名録」(九八年)には「彫刻指物並家具製造商」として記載があり、一九〇一(明治三四)年一月設立をみた「横浜彫工業組合」の発起人にもなっていることから有力な彫刻家具師であったとして間違いない。

一九一〇年の日英博には品川商会とともに彫刻家具を出品しているが、一五年の巴奈馬太平洋博では「高松常作」名で出品しており、この間に代替わりしたものとと思われる。高松常作の高松家具工場は関東大震災までは存在したようであるが、震災後の横浜彫刻家具界からその名を確認することはできない。

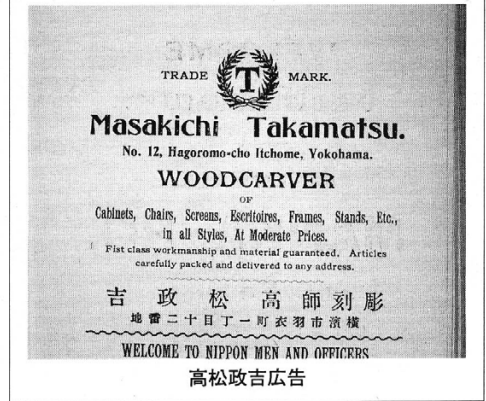
丹下武三郎

丹下武三郎については、一九〇八(明治四一)年四月二五日付横浜貿易新報の「彫刻家丹下氏の略歴」が詳しい。

「去二日逝去したる市内南太田町丹下工場主丹下武三郎氏の略歴を聞くに氏は文久元年三月十五日を以て京都中京衣棚に生れ呉服商板倉仙輔氏の次男なりしが幼にして丹下嘉助氏に養はれ十四歳の時初めて京都彫刻の名匠堀田瑞松氏の門に入り唐木細工及び彫刻の業を学ぶ。僅に数年にして技大に進む師の賞を受くること数回明治十三年大阪に出て名匠竹本観谷氏の門に遊び彫刻の技術大に発達す。依て両師の一字を受け爾来松谷と号して紀念とせり。十七年東京に上り専心象牙彫刻の業に従事し遂に一工場を起し数十人の職工を雇入れ頻りに輸出品の作製に従事せしが二十二年に至り工場を横浜に移し各商館の手を経て海外に輸出せり。二十七年始めて浮上り芝山彫刻と称する一種独特の額面書棚等を製作して輸出せしに欧米人の賞賛を博



遠藤家具工場広告



高松政吉広告

し爾來販路大に開く。三一年初めて西洋家具の製造に従事し千辛万苦遂に今日の成功を致せり。之れ素より氏の丹精に依ると雖も亦東洋美術王サムライ商会主野村洋三氏の援助に須つこと多しと。」

ちなみに、野村洋三の主宰するサムライ商会の店舗建築における彫刻意匠は丹下武三郎の手になると伝えられる。サムライ商会の扱った彫刻家具もおそらく丹下工場の作品であろう。丹下工場は、大岡川道慶橋際南太田町一、七三九番地に所在し、武三郎の死後、一五(大正四)年二月中野倉三郎、小泉安五郎、丹下トシ、真保新松、村上彦三郎の五名により「合名会社丹下彫刻家具製作所」となる。

明治後期ともなると、横浜の彫刻家具界に今関関太郎、川村利三郎、鈴木留吉、真保新松といった新顔が登場してくる。とりわけ、丹下門下の真保新松は、丹下武三郎と入れ替わりのようにあらわれ、「横浜彫刻家具合名会社」(〇八年)、「横浜彫刻家具製造相田合名会社」(〇八年)、「相田合資会社」(一四年)、「合名会社丹下彫刻家具製作所」(一五年)、「合名会社真保商会」(一九年)、「美術工業株式会社」(二一年)を次々と興し、震災後も一貫して彫刻家具の製造販売に関係した。

また、日光家具の伸長も明治後期以降目立ってくる。『外国貿易概覧』は一九〇八(明治四一)年度版で始めて横浜港からの欧米向け輸出家具を「横浜彫」と「日光彫」とに分けて記述するようになる。「横浜彫」

は「桂、桜ノ原料ニ龍、菖蒲、梅等ノ彫刻ヲ施シラック塗リトシテ紫檀擬ヒニ塗リ上ケタルモノ」とし、「日光彫」は「椽ノ原料ニ牡丹、菊、蓮、菖蒲、獅子、龍、三猿等ノ簡單ナル彫刻ヲ施シアリ而シテ鶯色ニ塗リ上ケタルモノ」としている。価格も、横浜彫椅子の六〜三円に對し、日光彫二〜五円と低廉なこともあって輸出を増大させた。

彫刻家具は一九〇五、〇六年をピークとして下降し、第一次大戦後ややも直したかみえたが、関東大震災により壊滅的な打撃を受け、丹下工場や高松工場の再興はならなかった。篠原義雄、真保新松、長谷川長太郎らが彫刻家具の復興に尽力したが、昔日の勢いを回復するには至らず、篠原義雄や長谷川長太郎らが設立した「有限責任横浜輸出彫刻家具信用販売購買利用組合」も一九三〇年代には休止状態となった。

一方、二四(大正一三)年六月二〇日サムライ商会の野村洋三らが設立した「株式会社三光家具製作所」は、東京高等工芸学校から富沢市五郎を迎え(三二年六月代表取締役となる)、高級家具の製作に乗りだし、生糸検査所貴賓室、ホテル・ニューグランド、神奈川県庁舎、横浜税関庁舎などの家具製作にあたるが、作風上の位置は彫刻家具の系譜に連なるものとみてよく、横浜彫刻家具の伝統は「三光家具」において蘇生したとみることが出来る。

(堀 勇良)

横浜家具を
創った人びと

横浜家具発祥 ゴールマン伝説

横浜家具の発祥については、『横浜市史稿 産業編』（昭和七年）の記述がよく知られている。

「洋式家具製造業は、開国後に於ける新規の事業である。我国とは全く相隔った生活状態にある外人の事である故、開港当時這入って来た外人は、種々の点に於て生活するには全く困難の事であつたらうと思はれる。各国領事が神奈川の諸寺院に領事館を設けた頃の調度は、多く寺の器具を使用していた様である。漸次に残留者も多くなつて来たので、其器具・調度類の必要に迫られたのは当然の事であつた。当時、英国人ゴールマンは、元町に居住する製函業者箱安及び馬具商馬具安の兩人に、形式を指示して製作せしめたのが、蓋し洋式家具製作の濫觴の様である。」同様の記述は『吾等の神奈川県』（昭和三年）にも「横浜の西洋家具は開港当時移住し来れる英人ゴールマンによって元町に居住の製函業者箱安並に馬具商馬具安の兩名に其製作技術を伝授したるが濫觴の如し」とあり、大正一五年四月一三日付横浜貿易新報の「西洋家具の展覧會」記事にも「箱安馬具安の兩人が開港当時ゴールドマン氏より西洋家具の製作を教えられたのが基で横浜の西洋家具は今日の發達を見た」とあり、大正末には横浜家具発祥伝説が成立していたようである。しかし、横浜家具の恩人ともいふべきゴールマン、あるいはコールマン、ゴールマンの素姓を明らかにした文献に

接していない。

ディレクトリー（外国人住所録）を見てみると、幕末期の横浜居留地にゴールマンらしき人物はみあたらず、時代はくだって一八八二（明治一五）年版ディレクトリーに家具商ゴールマン商会H.J.Gorman & Co.の記載と広告の掲載を見出すことができる。ジャパン・ガゼット紙の広

H. J. GORMAN & Co.,
FURNITURE BROKERS,
 No. 83, Main Street, Yokohama,
 (Temporarily)
 Auctions attended, and Goods bought
 on commission.
 Yokohama, Jan. 27th, 1881.

ゴールマンの開業広告 The Japan Gazette. 1881.1.27

告では八一年一月の開業になり、ゴールマン商会の存在はディレクトリー九二年版まで確認できる。ゴールマンは、元キルビー商会C.Kirby & Co.の商館員。ディレクトリーでは六八（明治元）年版に長崎のオルト商会Alt & Co.の商館員として初登場する。七〇年版では大阪オルト商会に転じており、次いで

マシュー・ゴールマン商会Mathew, Gorman & Co.を興す。後、神戸に移ってキルビー商会に入り、東京支店誌を経て八〇年版において横浜キルビー商会に記載される。そして翌八一年家具商として独立することになる。ゴールマンの足跡を追ってみると、横浜家具伝説はどうみても幕末期までは遡りえなくなってしまうのであるが、横浜の居留外国人と元

J. L. LIEBERMANN,
GENERAL COMMISSION AGENT.
 YOKOHAMA FURNITURE DEPOT,
 No. 83, CLUB STREET.
 Parties requiring New or Second Hand Furniture
 are requested to inspect the stock.
 J. L. LIEBERMANN,
 Proprietor.

リーベルマンの広告 The Japan Gazette Hong List & Directory. 1872

町の箱屋馬具屋との関係構図が幕末期に存在していたであろうことは疑いないところである。東京芝家具の草分けであり、「本邦椅子製造元祖」の碑をもつ古家豊吉は、一八六九（明治二）年「横浜に赴き、其の模造製作に従事すると二ヶ年」といわれ、また、日本洋

家具室内装飾業の開拓者とされる杉田幸五郎も明治初年の横浜での修行時代を有している。横浜椅子張り業（ばんこ屋）の始祖大原甚五兵衛や、元町洋家具商の老舗田辺大五郎の創業も七二年とされる。いずれも家具商ゴールマン以前のことになり、無名のゴールマンの存在を想定せざるを得ないのである。

横浜の外国人居留地において西洋家具を扱った最初の業種はおそらくオークションニア競売屋であろう。一八六一年二月三〇日、競売屋のショイヤーR.Schoyerが、ペイツ博士の家具を競売した記録があり、居留外国人の死去や離日、あるいは転居に際して家具の競売は日常的に行われていた。競売にかかるにあたって当然ながら家具は修理され、そこに元町の馬具屋らが駆りだされたであろうことは想像に難くない。

西洋人家具商としては、六七年六月五日付でハムラー商会Hummeler & Co.が広告を出しており、七〇年代に入ると独人リーベルマンJ.L.Liebermannが横浜家具倉庫Yokohama Furniture Depotを開き、七四年七月ロスムントRothmundがこれを継ぐ。これらハムラー、リーベルマン、ロスムントの名は大正期ともなると忘れ去られ、記憶の届くところにあつたゴールマンの名に結びつけられて横浜家具発祥伝説が成立したと考えるのがかなものであるうか。（堀 勇良）

蔵旧弥久鈴木農豪 の諸新聞

「甞る明治大正の記憶―岡コレクシオン」展では、コレクシオンの性格もあって当館としては異色の「見て楽しい展示」を心がけた。忘れ去られようとしている明治大正の資料に接し、自然にその時代にタイムトリップすることができれば、と考えたのである。

とはいえ、コレクシオン中の『横浜毎日新聞』や『朝野新聞』は、単に古いというだけでなく、その由来が判明したこともあって資料の歴史的価値を一層高めることになったのは思いがけない収穫であった。

岡信孝氏（寄贈者代表）のご兄弟である岡橋樹さんから、古い新聞を寄贈したいとの申し出を受けたのは約二年前のことである。慶応四年の『中外新聞』や明治七・八・十二年の『横浜毎日新聞』、明治一年の『朝野新聞』を合本の形で所蔵しているとのこと。当館には『横浜毎日新聞』の原紙は明治五・六年をのぞいてはわずかしがなく、さらに『朝野新聞』にいたっては一号分も所蔵していなかったため、手にしたときの喜びはひとしおであった。

ところが整理をするうち、三紙の合本の表紙に毛筆で書かれた「橋樹郡長尾村」「成始堂」「鈴木久弥」「鈴木所蔵」などの文字が気になり始めた。そしていくつかが明らかになるにつれ、喜びは驚きに変わった。

まず幕末期に幕府領となっていた橋樹郡長尾村であるが、明治二年の

戸数が一二三戸、人口は七六〇人（明治四年には戸数一三二、人口八四六とあまり増加していない）、二二年の町村制施行により向丘村の大字となり、その後昭和十三年に川崎市に編入されている（『角川日本地名大辞典』14神奈川県）。

当時長尾村には、南部の神木長尾（しばくながお）に寺子屋松月堂（明治六年に化育学舎、八年に化育学校と改称）、北部の河内長尾に鈴木学舎（明治六年に設置、八年に成始学校と改称）があった。この二つの学校は明治一〇年に河内長尾に経緯学校が新築され合併されたが、『神奈川県教育史』通史編上巻）、成始堂とは多分鈴木久弥が開いていた私塾であろう。



鈴木久弥

では鈴木久弥とは何者か。『神奈川県史』（別編1人物）には二人の久弥が紹介されている。一人は、天保年間に西多摩郡殿ヶ谷村の石塚家に生まれ、後に長尾村の豪農で累代名主役をつとめた鈴木家へ入婿し、その名を鈴木久弥と改めた人物。明治初期、彼は区長、学区取締、戸長

となり、明治一二年二月第一回県会議員選挙に当選、一四年一月に病氣

で辞任するまで県議をつとめた。自由民権運動の在村活動家のリーダーとして活躍し、明治四一年二月三日に死去、墓は川崎市高津区の日台宗妙薬寺にある。

もう一人は、安政三年一月一日に上布田宿（現調布市）で代々名主役をつとめた原家の三男（次男とも）に生まれた人物。原泰輔（豊穂、南多摩郡長、北多摩自由党のリーダーの一人）の末弟で、一六才で長尾村の鈴木久弥（前出）の養嗣子となり、鈴木藤蔵（長じてのち久弥）に名を改め、井田文三の生涯の同志といわれた。ちなみに井田文三とは、溝ノ口の上田忠一郎家に入りにいた在村の民権活動家で明治一五年から県会議員をつとめている。嘉永六年、長尾村で代々名主役の井田家に生まれた文三は、二一才で長尾村はか三ヶ村の戸長に選出されたが、明治九年政府の地方行政を批判して辞職、以後自由民権運動の地域のリーダーとして、青年たちを組織し学習・啓蒙活動を展開した。その中の一人が鈴木藤蔵（久弥）で、民権家の一人として文三を助け活躍（小村孝雄『神奈川の夜明け』）、その後向丘村

神奈川県人懇親会（明治一三年一月二八日、向島八百松楼）に出席した久弥も、同年二月五日の府中駅高安寺での武蔵六郡（三多摩・橋樹・都筑・久良岐）懇親会に仮幹事として出席した久弥（『川崎市史』資料編3近代、『神奈川の夜明け』）も前者であろう。

ではなぜ鈴木家旧蔵の新聞が久本村の岡家に残ったのか。『上田家文書』には、明治一三年一〇月八日、再興なった立憲自由党に岡家の六代目である重孝氏が入党し、その後積極的な活動を展開した記録が残っているから（大木基子『明治二十年代における一民権家』、『神奈川県史』各論編1政治行政）、党派的問題は別として、以前から在村の民権運動家の同志としてなんらかの関係があり、いつの時点にか岡家に渡ったのであろう。

豪農民権家であった久弥が新聞を購入し、私塾で青年たちに縦覧させていた意味は大きい。『横浜毎日新聞』は明治三年二月八日に横浜で創刊されたわが国最初の日刊邦字新聞で改進黨系の民権派新聞、『朝野新聞』は新聞紙条例批判等有名な急進的な自由党系民権派新聞であるから、明治政府に批判的な新聞であったことは明白である。『二代目』の久弥は、こうした新聞の影響を受け地域の民権運動のリーダーとして成長していったのであろう。まさしく在村民権家の家に由緒正しく残った新聞といえる。

（吉良芳恵）

ピアノ製造と 横浜華僑

横浜居留地でピアノの調律・製造・販売を行なった人々として、幕末明治初期のM・チザムやW・A・クレイン、やや遅れてドイツ人のO・カイルやG・ドーリング、そして明治二〇年代に入るとモートリー商会、スウェーデン商会らがあげられる。彼らによってもたらされた西洋楽器が日本での西洋音楽の普及をうながしていくが、こうした西洋楽器、とりわけピアノ製造の分野に足跡を残した華僑がいた。

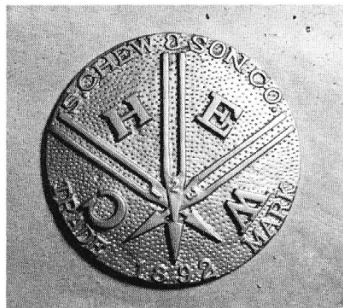


図1 周興華洋琴工場の商標（周斐岑氏蔵）

周宝生・周筱生の来日

周宝生・周筱生の兄弟は浙江省鎮海県の農村に生まれ、長じてのち上海に出て、欧米人が経営するピアノ会社で働き、ピアノ製造の技術を身につけた。その後勤めていた会社が日本に進出することになり、はじめは兄の周宝生が来浜し、後に弟の周生がやってきたといわれる。彼らが勤めていた上海の会社はモートリー

商会といわれ、その後横浜のスウェーデン商会で技術をみがいた。モートリー商会はS・モートリーが上海の江蘇路（現四川中路）でピアノの輸入販売、調律・修理を行っていた商会である。一八九一年、モートリーは横浜支店を居留地五九番地に開き（のち六一番地に移転）、ピアノ、オルガンをはじめとする西洋楽器の輸入と調律・修理を行なった。その後横浜支店長となったC・スウェーデンが同商会を継承し、一九〇二年にスウェーデン商会を設立した。モートリー商会の時期もスウェーデン商会の時期も、工場には「See Sung」「Cheung」「Cheung Brothers」「Cheung Brothers Piano Co.」などの中国人の工場長、職人が何人も働いていた。周兄弟もそうした一人であったのだろう。

現存する周興華楽器店（後に周興華洋琴工場）作製のピアノには、同店の商標が刻印されているが（図1）、それには「S・CHEW & SON CO. 1892」と印されている。この「1892」が気になる数字である。周興華楽器店の創立年は一九一二年であるから『商工信用録』大正六年、東京興信所）、一体これは何を意味するのだろうか。仮にこの数字が周兄弟の来浜の年であるとするれば、一八九二年にはスウェーデン商会はまだ存在しないので、周はモートリー商会のもとに横浜を訪れ、同商会がスウェーデン商会に継承された後もそのままそこに残ったということになる。

周興華楽器店

兄の周宝生は明治三〇年代の末には東京に移り、ピアノ販売関係の仕事を営む。弟の周筱生は一九二二年、兄と協力して山下町一三番地、前田橋通りの元町通りに周興華楽器店「S・Cheung Piano Maker」を開いた。同店の開業に関しては、大正元年頃、老舗の楽器商ドーリング商会が閉店する際、スウェーデン商会に勤めていた周筱生に一切を譲渡し、周はそれをもとに店を興したという記録がある（『大横浜』三〇巻三号、昭和八年一〇月）。このことから、周興華楽器店は技術的にはスウェーデン商会の流れをくみ、器材などはドーリング商会のものを引き継いだことがわかる。また、一九二二年二月二三日号の『ジャパン・ガゼット』に周興華楽器店の広告が掲載されているが、その宣伝文句に「G・E・カンハウザーをはじめ多くのピアノ調律師に推薦された」とある。G・E・カンハウザーはドーリング商会とスウェーデン商会の調律師であった人物である。周はスウェーデン商会の時代にカンハウザーから重陶を受けたのであろうが、この広告は両商会と周筱生との関係を示している。ちなみにドーリング商会は、日本で国産ピアノ第一号を作製した西川ピアノの創始者、西川虎吉がピアノ製造の技術を学んだところである。

さて、周興華楽器店ではピアノの製造・販売をはじめ各種の西洋楽器を販売していた。顧客は主として居留地に住む西洋人の商社員や外交官であった。彼らは仕事の性格上移動が激しかったため、ピアノは販売だけでなくレンタルの場合も多かった。またピアノの材料については、外廓の木材は日本で調達したが、内部構造の響版、ピン、ワイヤー、アクションといった部品はイギリス製やドイツ製のもの、スウェーデン商会などから仕入れていたと言う。周興華楽器店はその後堀内一三八番地に工場を構えて事業を拡大し、大勢の職人をかかえていた。後に大塚ピアノを創設する大塚錠吉も周筱生のものでピアノ製造の技術を学んだ職人の一人であった。

大正二二（一九三三）年九月二日、関東大地震が発生した。中華街一帯は古い木造とレンガ造りの建物が密集していたため、倒壊と火災により甚大な被害をこうむった。前田橋通りの周興華楽器店も焼失し、主人の周筱生は逃げおくれで犠牲となった。『大阪時事新報』大正二二年九月八日の夕刊には、九月七日横浜から来航した湖南丸の乗船避難民名簿が掲載されている。その中に二〇人あまりの中国人の名前が見られるが、彼らはほとんどが堀内の一一家の関係者である。一族の長である周筱生を失った一家は混乱の中で大阪へと避難し、その後上海を経由して故郷の鎮海県へと帰っていった。ただし、周一族がすべて帰国してしまっただけではなく、横浜に踏みとどまっ



図2 周興華楽器店ゆかりのピアノ(齋藤龍氏蔵)

震災後の周興華洋琴工場

震災以後は周筱生の長男、周讓傑が家業を継ぎ、故郷に帰った者達を呼び寄せ工場を再開させた。昭和八年の横浜市勸業課編『横浜市商工業内』によれば、「周興華洋琴工場」の営業主は周讓傑、営業種目はピアノ製造、営業所は堀ノ内町一三八番地となっている。

この頃の堀ノ内の工場は二階建て住居と工場を兼ねた大きな建物だった。天神橋に向かう通りに面して正面玄関があり、一階に工場、ショールーム、応接室などがあった。裏手の庭や倉庫にはたくさん木材が積み立てられていた。工場は一階と二階に分かれ、それぞれ作業工程が異なっていた。一階では木材を裁断してかなをかけたたり、さまざまな金属の部品を旋盤でけずったりしていたが、二階では主に組み立てが行なわれていた。部品は国内でも調達したが、上海に周讓傑の姉が経営する楽器店があり、そこからも輸入していたという。昭和一七、八年頃には中国人と日本人の職人が二〇人から三〇人いて、工場の向かいの従業員用の宿舍に住んでいた。しかし、昭和二〇年四月一五日、米軍のB29による空襲で、堀ノ内の一帯は大きな被害をうけ、周興華洋琴工場は焼失した。

現在確認される範囲では、周興華楽器店ゆかりのピアノは二台ある。一台は齋藤龍横濱市助役が所蔵され

(図2)、もう一台は周筱生の孫にあたる周斐岑氏が所蔵している。年代的には齋藤家のピアノが古く、一九二五年頃堀ノ内の周ピアノで購入されたものと聞く。この美しい貝の象眼細工がほどこされたピアノは響板に「PRUSSNER」と刻印され、ふたを開けると「EMGO-LUCHE」と印されている。一方、周家のピアノは昭和期に製造されたもので、響板とふたに「S.CHEW & SON」と印されている。このことから、齋藤家のピアノは外国から輸入した内部構造・外廓を周興華楽器店で組み立てたものか、あるいは完全な形で輸入されたものを販売したものである。

周ピアノの初期段階ではこうした製造・販売方法が多かったのではないだろうか。周家のピアノは響板から外廓まで周興華洋琴工場で製造されたものである。なお、英語の商号が「S.CHEW」ではなく「S.CHEW & SON」となっているのは、周筱生の息子、周讓傑の時代のものであることを示している。

李兄弟ピアノ製作所

横浜にはもう一つ李佐衡という人物が興したピアノ工場があった。李佐衡は、一八八四年周一族と同郷の浙江省鎮海県に生まれた。二〇歳で来日し、周興華楽器店と東京の共益商会で研鑽をつみ、大正一〇年、弟の李良鏗とともに堀ノ内町一六番地に李兄弟ピアノ製作所を開いた。周興華楽器店が堀ノ内に工場を構え

たのは、李佐衡が堀ノ内にいたからだとも言われるが、この二つのピアノ工場はすぐそばにあった。というのも李家と周家は姻戚関係にある。

図3の写真は一九二三年、故郷の鎮海県で撮影された李一家の写真であるが、中央の婦人は李佐衡の母で、周興華楽器店の周宝生、周筱生の姉である。李佐衡は、ピアノ職人として地歩を固めつつあった叔父の周兄弟をたよって、横浜をおとずれたのであろう。



図3 後列右から2人目が李佐衡(李全英氏蔵)

関東大震災の際、李佐衡も家族を連れて周一家とともに湖南丸で大阪に避難し、その後故郷にもどった。

図3の写真はその時撮影されたものかもしれない。李はまもなくして帰浜し、李兄弟ピアノ製作所を再開する。彼は、大正一四年に出版された『横浜復興録』の「横浜市民感謝録」にその名が見える数少ない中国人の一人である。

李兄弟ピアノ製作所で作られたピアノは日本音楽学校、鎌倉の海浜ホテル、また小中学校などにおさめられた(『神奈川県紳士録』昭和五年)。こうした震災をも克服した李兄弟ピアノ製作所であったが、周ピアノと同様、昭和二〇年四月一五日の空襲ですべてが焼失してしまった。李佐衡をはじめ一族の多くはまもなく堀ノ内の工場を引き払い帰国した。ただ長男の李民華氏は横浜に残ったが、家業のピアノ製造を再興することはままならなかった。

中国人のピアノ製造者としては上記に加えて、横浜ピアノ合資会社というものもあった。同社は周興華楽器店で働いていた王友琴が独立して開業したもので、ピアノの製造と販売を行っていた。所在地は山下町一三九番地、合資会社としては昭和三年七月に設立されている(『横浜貿易新報』昭和三年八月二日)。

近代日本におけるピアノ製造技術は、W・A・クレイン、O・カイル、あるいはモートリー商会、スウェーデン商会といった欧米人によってもたらされ、やがて西川ピアノ、大塚ピアノの日本人による製造へとうつていくが、そうしたピアノ製造者の系譜の中に、周宝生、周筱生、李佐衡ら中国人技術者の確固たる足跡が刻まれているのである。

本小稿の執筆にあたり、齋藤龍、周斐岑、李全英、周淑霞、周金洋の各氏にお世話になりました。記して謝意を表します。(伊藤泉美)

閲覧室から

横浜では、明治一〇年代頃より生糸を中心とする商況報告が、有力商店から出されていたようです。当館でもいくつか収集していますが、今回はそれらのうち今年度欠号を補充したものと、以前この欄で紹介した新聞の補充分を合わせて紹介したいと思います。近く複製を作成して開架書架に並べる予定です。

『商況日報』

横浜弁天通二丁目にあった、横浜で最も有力な生糸売込商の一つである茂木商店が発行した、生糸と屑糸などその付属品の商況報告。紙名が日報となっており翌日に次の号が出ることもあるが、大体一、二日おきに発行されたようだ。一枚刷りで、付録が付くこともある。

当館では、明治二〇年三月七日、五月一日、六月三日、七月三日、一〇月二日、明治二二年二月二日、明治二二年六月六日、二月二九日、明治二三年四月一〇日、八月二五日の本紙六五号分、付録一、二号分(欠号多数)を所蔵している。

『生糸並ニ付属品報告』

(明治二〇年一月一日より『生糸並ニ付属品商況報告』と改題)

『商況日報』と同じく茂木商店が発行した、生糸とその付属品の商況報告。一枚刷りで、付録が付くこともある。こちらは三日から六日おきに

に発行されている。理由はわからないが、同時期に同じような内容の二通りの報告を出していたようだ。

当館では、明治二〇年五月一六日、明治二二年二月一〇日、四月二一日、五月一日、一〇月一日、一一月一日、一一月二六日、一二月二六日、明治二二年二月三一日、明治二三年一月一六日、三月六日、明治二四年三月二日、八月一日、一一月三二日の本紙六一号分、付録三〇号分(欠号多数)を所蔵している。

『横浜商品日報』・『横浜蚕糸日報』・『横浜生糸商況報告』

『開港のひろば』第四八号で紹介した、南中舎が発行した新聞。少し補充ができたので以下にあげたい。

『横浜商品日報』

明治三三年六月一四日分。

『横浜蚕糸日報』

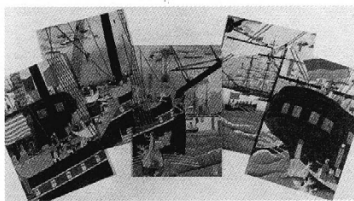
明治三四年一月三〇日、一一月二七日、明治三五年一月二日、二月二八日、五月二三日、五月二七日、七月一日、七月一四日、九月一六日、一〇月一七日、一〇月一八日、一一月一〇日、一一月二二日、一一月二三日の本紙一五号分。

『横浜生糸商況報告』

明治二五年二月二日、明治三四年一月三〇日、一一月二七日、明治三五年一月二日、二月二八日、明治三八年一月一〇日、明治四〇年三月二六日の本紙七号分。

(上田由美)

資料館
だより



五雲亭貞秀画「横浜交易西洋人荷物運送之図」(文久元年=1861年) 絵はかき5枚1組400円当館・受付で販売。

▼展示

(1)「横浜家具を創った人びと」1/31(外)~4/24(内) 横浜家具は、最大マーケットを形成した家具オークションに付帯する家具修理に発し、居留地に西洋家具商を生みだし、元町に居留外国人相手の洋家具業を派生させるとともに、居留地中華街に藤家具製造を発展させた。そのいっぽうで彫刻家具 Woodcarved Furniture と称される特異な輸出向家具を創りだした。本展示は、横浜家具を創りだした人びとに焦点をあて、横浜家具の系譜を明らかにしようとするものである。

(2)「浮世絵に見る幕末明治の横浜」(仮題) 4月下旬~7月下旬 当館所蔵の瓦版、浮世絵を紹介しつつ、開国・開港期から明治初期にかけての日本と横浜の歴史をたどる。

▼寄贈資料

(1) 横浜市役所勤業課編『産業の横浜』昭和4年ほか 2点(緑区長津田 安藤行男氏)

(2) 神奈川県農産販売協連横浜支部旧蔵文書 269点(緑区十日市場町 石井憲保氏)

- (3) 震災前山下町93番地付近写真ほか 4点(磯子区滝頭 石橋和家子氏)
- (4) 産業経済関係文献 6点(東京都大田区南馬込 服部一馬氏)
- (5) 『講談社の絵本』(大日本雄弁会講談社発行)ほか 12点(戸塚区矢部町 松本喜美子氏)
- (6) 増田家資料ほか 15点(南区南太田町 増田好夫氏)

- (7) 地口文献資料 24点(金沢区富岡西 五味良子氏)
- (8) 助郷札 3点(磯子区久木町 平井孝昌氏)
- (9) ポール・C・ブルーム氏の写真(白黒紙焼) 1点(東京都北区西ヶ原 ドナルド・キーン氏)
- (10) 『Shipping & Trade News』誌 1960年5月号(日米修好百年記念特別号)ほか 2点(鶴見区北寺尾 木村昌之氏)
- (11) 各種航空写真ほか 13点(磯子区洋光台 斎藤利生氏)

▼寄託資料

- (1) 木村芥舟烏帽子ほか 5点(鶴見区北寺尾 木村昌之氏)

閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、下記の期間閲覧室を休室いたします。
・2月27日(火)~3月1日(金)
また、月末整理日のため、次の日は閲覧室を休室いたします。
・1月31日(水)
ご理解とご協力をお願いいたします。